

【論文】（査読付き）

前期レヴィナスにおける「吐き気」と「疲労と努力」について

高野浩之

はじめに

本稿は、前期レヴィナスの現象学的分析のうち、「吐き気」と「疲労と努力」に焦点を絞り、両者の構造の相似と差異を明確にすることを目標とする。その際、ジャック・ロランとジョエル・アンセルの見解を比較検討することにする。初期のレヴィナスの思考に後の諸概念の萌芽を見出そうとする¹ロランは、「逃走論」における「吐き気」に『実存から実存者へ』のテーマである匿名的存在一般、つまり「ある(II y a)」の開示を見ている。それに対してアンセルは、そのような「回顧的」解釈では当時のレヴィナスの哲学的企図を見誤ってしまうとし、「存在論主義」と「観念論」の両者の批判という観点から、「逃走論」に先立つないし同時期の資料を再検討しながら、「吐き気」に人間存在の「自給自足体制」とそれからの逃走欲求を見出している²。アンセルの見るところ「自給自足体制」は、「ある」とは峻別されるべきであり、したがって「吐き気」から「ある」に迫ろうとするロランの解釈は無理筋であるとされる。この批判は、レヴィナスの思想の生成史的観点からなされており、これがアンセルの戦略である。本稿は、ロランの分析に、「ある」と人間存在とのあいだの構造的差異への無理解が存するという点で、アンセルに与する。とはいえ、アンセルの手法では具体的現象の詳しい分析が手薄になるので、本稿ではこの不足を補うことにする。この現象分析によって「吐き気」と類似した構造をもつ「疲労と努力」が「ある」を開示する側面を有するという点を見出すことができ、結果として両現象の構造的差異も浮き彫りとなるだろう。

以上の目論見のもと、本稿は以下の構成をとる。まず第一章では、「逃走論」の「吐き気」を分析し、これに関するロランの解釈を検討する。次に第二章で、『実存から実存者へ』における「ある」につながる「不眠」を考察し、ロランへの批判を行う。第三章では、アンセルの「自給自足体制」を検討し、この点で彼女のロラン批判が本稿の立場と合致することを確認する。最後に第四章で、『実存から実存者へ』における「疲労と努力」の分析を「瞬間」の生成という観点から行い、この「瞬間」の構成から「ある」の特徴が指し示される点を見出す。これにより、「吐き気」と「疲労と努力」の構造的差異が理解できるように

¹ Cf. Jacques Rolland, « Sortir de l'être par une nouvelle voie », dans *De l'évasion*, Emmanuel Levinas, Le livre de poche, 2018, p. 13.

² Joëlle Hansel, « Autrement que Heidegger : Levinas et l'ontologie à la française », dans *Levinas de l'Être à l'Autre*, Joëlle Hansel (dir.), PUF, 2006, pp. 37-38. / Joëlle Hansel, « "L'être est" et "Il y a" : Autarcie et anonymat de l'être dans les premiers écrits d'Emmanuel Levinas. », dans *Etudes phénoménologiques*, Vrin, 2006, 43/44, pp. 59-63.

なる。

1. 「逃走論」における「吐き気」

1-1. 「逃走論」における「吐き気」の分析

まず、レヴィナスの「吐き気」の分析の考察からはじめよう。「吐き気」は胸がむかつき、自分のなかのものを外へ吐き出してしまいたい、しかしそれもできない状態である。そのようなとき、

吐き気がする状態によって [...] 私たちはどこにも逃げ場がないような仕方で〔自己〕閉塞させられている。しかし、この吐き気の状態は、外部からやってきて私たちを閉塞状態に追い込むわけではない。私たちは内部から催しているのであり、私たち自身の奥底が私たち自身の内で窒息しているのであって、[だから]私たちは「中心に苦痛をもっている＝胸がむかつく (*avoir mal au cœur*)」のである。(DE, 115)

居心地の悪さの原因が自分の外部ではなく、内部にあることが吐き気の特徴である。つまり、吐き気を催すとき、私たちは自分で自分を圧迫しているということになる。とはいえ、レヴィナスが吐き気に見出すのは、単に腹の中のものを外に出そうとするさいの意識的事実ではない。この点にこそ、「吐き気を構成する独自の(*sui generis*)含意」(DE, 118)が隠されている。

まず確認されるべきは、吐き気のなかに存する独特の「二元性」(DE, 115)である。というのも、「私たち自身に反逆する私たち自身の現前」(*ibid.*)が、ひとり人間において見いだされるからである。これは、苦しむ自分とその苦痛に追い込む自分が分裂したかたちで、しかもひとり人間のなかで、さらに同時的に成立するということである。この二元性の特殊性は、吐き気の状態にあるかぎり「克服不可能」(*ibid.*)であることにある。この不可能性は、吐き気が吐き気であるかぎり、二元性が肯定されてしまうことにある。つまり、吐き気は、人間が自分自身に反逆する自己の現前の解消をめざすにもかかわらず、ほかならぬその吐き気が自己現前を肯定してしまうという絶望的状况にある。

次に注目しなければならないのは、この「絶望」こそが、人間の存在そのものを開示する決定的な要素として役立つという点である。以下の記述を見てみよう。

[...] 独自の含意 [...] が、吐き気のなかに、私たち存在者の存在そのものの実現を見ることを可能にしているのである。というのも、吐き気と私たちのあいだの関係を構成するものが、吐き気そのものだからである。吐き気の容赦のなさが、吐き気の根底そのものを構成しているのである。避けようのないこの現前の絶望が、この現前そのものを構成しているのである。したがって、吐き気はただ単に絶対的な

何かとして自己措定するだけではなく、自己措定する行為そのものとして自己措定するのである。[...] この措定の本質は、みずからに固有の実在性をまえにした際の無力にある。とはいえ、この無力がこの実在性そのものを構成しているのである。したがって、吐き気は、完全なその無力さにおいて、存在の現前を私たちに開示してくれるのであって、この無力が吐き気を吐き気たらしめている、とすることができる。(DE, 118)

吐き気における「絶望」は、自己を避けようのない絶対的なものとして措定してしまうにとどまらず、そもそも自己措定する行為そのものとして自己措定すると述べられている。まず胃に苦痛を感じる私が存在して、その状態から逃げられないものとして自分自身をあとから措定するという構造ではなく、吐き気自体がそもそも自己措定するはたらきだからこそ、それによって措定された自己を放棄することができないという順序であることが強調されている。吐き気の特権的な現象にしているのは「私たち存在者の存在そのものの実現を見ることを可能にする」という点にある。これが言わんとしていることは、自己措定を解消しようとするはたらき（吐き気）は、それ自体自己措定するはたらきである以上、自己措定を構造上放棄することができないというこの「無力さ」のおかげで、人間の存在そのものが、放棄しようのない「実在性」をもつものとして見いだされるようになる、ということである。したがって、人間の存在は自己措定するはたらきであり、自己を措定する以上、措定する主体とそのはたらきによって措定される自己との分裂が生じるとともに、主体は自己と分離できない仕方で密着していることになる。したがって、この自己は背負うべき定めになっており、たとえこの自己を拒否しようとしても拒否するという仕方でこれを背負ってしまうことになる（吐き気の現象）というわけである。だからこそ、「私たちの存在の奥底には一種の余計な負荷」(DE, 106)があると言えるのである。

1-2. ロランによる「吐き気」の考察

では次に、「吐き気」に関するロランの考察を検討しよう。まず彼は、レヴィナスがハイデガーにならった人間存在の「事実性の解釈学」を実践している点を確認する³。レヴィナスは、ハイデガーが現存在の事実性として「被投性」を見出す仕方に特異なかたちで注目する。「特異」というのは、「レヴィナスの反省が被投性にこだわっていくのは、課された状況の彼方へと赴く傾向を実存がもはや自らのうちに見出さないような状況、投げられた存在が自らを投企するどんな可能性もいわば麻痺させてしまうような状況を見出し、描

³ Cf. EDE, pp. 98-100. / Rolland, op. cit., pp. 25-29. また、レヴィナスがハイデガーの「事実性の解釈学」を主知主義の乗り越えとして評価し、人間の営みとして哲学を解釈する手法を自らのものとした点について、Jean Greisch, « Heidegger et Levinas Interprètes de la facticité », dans *Positivité et Transcendance*, Jean-Luc Marion (dir.), PUF, 2000, pp. 181-207 を参照。

き出すため」⁴だからである。つまり、レヴィナスは可能性への開けという観点ではなく、この開けがもはや不可能となるような仕方人間存在が自分自身に釘付けされているという点を強調するという点である⁵。この釘付けされていることを開示する「根本気分」が「吐き気」とされる。さらに、ロランはこの「吐き気」がハイデガーのいう「不安」とは異なる仕方無に関係し、この無の現前として、「ある」にいたることができる主張する。ハイデガー的「不安」は現存在のまえに存在者が現れるために必要となる「無」を開示するものであるとされる⁶。つまり、現存在が「存在者」とはじめて関われる媒体として無が考察されている以上、ハイデガーにおいては「存在と存在者の本質的結びつき」⁷が肯定されることになる。現存在は無を介してこそ自らとは異なる存在者と関係するのである。ここには他の存在者への開けが必然的に認められる。それに対して、自分自身への釘付けとして考慮された「吐き気」⁸は主体としての人間存在以外のものを指し示さず、この点で自分以外の存在者への開けをとまなう「不安」とは全く異なることになる。自分以外の全てがシャットアウトされる以上、「吐き気」は「存在者の前に私たちをもたらす」⁹のではなく、「存在者を全面的に後退させて無を露わにする」¹⁰のである。したがって、「吐き気」は存在者から切り離された「存在である限りでの存在として無を露わにする」¹¹。これは、前節で私たちが「吐き気」に見出した、自己の存在を自分で背負うという自己回帰の構造と軌を一にしている。ここで言われる「存在である限りでの存在」は存在者と関わらない「純粋な存在」¹²であり、「存在するという純粋な事実」¹³であるとされ、後年の『実存から実存者へ』などにおける「ある」と結びつくこととロランは見ている¹⁴。これが、「吐き気」から「ある」へいたるロランの理路である。

⁴ Rolland, op. cit., p. 28.

⁵ 1932年に発表された「マルティン・ハイデガーと存在論」において、すでに「現存在はみずからの諸可能性へと宿命づけられている」(EDE, 68)という記述が見られ、この時点でハイデガーの解釈は独特のものであったことがうかがわれる。これについては、馬場智一『倫理の他者レヴィナスにおける異教概念』、勁草書房、2012年、295-302頁を参照。

⁶ ここでロランは「形而上学とは何か」における以下の箇所を引用している。「不安の無の明るい夜において、存在者を存在者としてあらわにする根源的開示性が、つまりそれは存在者であって—そして無ではないということが、はじめて生じるのである。ここで私たちが言い添えた『そして無ではない』という言葉は、しかし後から付け足された説明ではなく、存在者一般の開示性を前もって可能にすることなのである。根源的に無化する無の本質は、無が現-存在を何よりもまず存在者としての存在者の前へもたらすことにある。」(Martin Heidegger, *Wegmarken*, Vittorio Klostermann, 1978, pp. 113-114. / Cf. Rolland, op. cit., p. 36.)

⁷ Rolland, op. cit., pp. 36-37.

⁸ 「吐き気とは、釘付けにされているという感情において告げられる存在として存在を露わにする根本気分である」(Ibid., p. 29.)

⁹ Ibid., p. 41.

¹⁰ Ibid., p. 37.

¹¹ Ibid., p. 41.

¹² Ibid., p. 40 et pass.

¹³ Ibid., p. 41.

¹⁴ Ibid., pp. 41-43.

2. 『実存から実存者へ』における「不眠」と「ある」

ロランの考察の是非を検討するためにも、肝心の「ある」に関するレヴィナス自身の考察を見ておく必要がある。本章では、『実存から実存者へ』における「不眠」の考察が「ある」を見出す道筋を描いていることに注目し、そこへ焦点を絞ることにする。

夜の暗闇のなかでひとり不眠に悩まされる状態を考えてみよう。不眠とは、眠ろうとするのに眠れない状態のことである。つまり、意識のスイッチを切ろうとするが、うまくいかないという状態である。これが逆説的状态に陥っていることは、意識のスイッチを切ろう（眠ろう）とするはたらきが逆に意識のスイッチを押してしまっている（眠ろうという意識が生じる）ことからよく理解できるだろう。つまり、不眠状態において、人間は自分で自分のやろうとすることを構造的にコントロールできなくなっているのである。この意味で、不眠は主体性の剥奪の経験であり、このとき覚醒しているのはもはや「私」ではなくなっている。

覚醒状態は匿名的である。不眠においては、夜私が覚醒しているわけではなく、目覚めているのは夜そのものなのである。「それ(Ça)」が目覚めている。(EE, 111)

不眠においては、夜の暗闇のなかにすべての事物が溶け込んでしまい（事物の消去）、残った主体もその主体性を剥奪され、もはや「私」という実存者もいなくなった状態でありながら、それでもやはり覚醒状態が匿名的なはたらきとして残る以上、「無」であるわけでもない。つまり、あらゆる存在者を否定するはたらきは、そのはたらき自体の肯定を含意しているため、絶対に否定されずに残存してしまう¹⁵。実存者の生起に先立つ「ある」の次元をレヴィナスはこのような理路で見出している¹⁶。

「不眠」における「ある」の「経験」は、自分の主体性が剥奪される「恐怖」¹⁷として記述される。この点では、たしかに「自己措定のはたらき」としての「吐き気」も、否応なしに自分の存在へと釘付けにされている以上、そこに「主体性」は認められないと考え

¹⁵ この点で、レヴィナス自身、ベルクソンの『創造的進化』第4章における「存在と無」の考察との並行性に言及している(cf. EE, pp. 103-104.)。とはいえ、「ベルクソンによる無の批判は存在者、現実存在する『何か』の必然性にしか向かっていない」(EE, p. 103.)、つまり存在論的差異を踏まえた議論になっていない点が批判される。

¹⁶ ロランは「ある」を見出すレヴィナスの理路がブランショへ与えたと思われる影響を度々示唆している(cf. Rolland, op. cit, pp. 44-45. / Silvano Petrosino et Jacques Rolland, *La vérité nomade, La Découverte*, 1984, p. 21.)。そこでは、ブランショ『文学空間』の次の一節が引かれている。

「夜のなかにすべてが消え去る。これは第一の夜である。[...] しかし、夜のなかにすべてが消え去ったとき、この『すべてが消え去った』が現れる。これがもうひとつの夜である。夜は『すべてが消え去った』の現れである。[...] 夜のなかで現れるのは、現れる夜であり [...]。」(Maurice Blanchot, *L'Espace littéraire*, Gallimard, 1968, pp. 215-216.)

¹⁷ 「あるが軽く触れること、それが恐怖である」、「恐怖はいわば意識からその『主体性』を剥奪する運動なのである」(EE, p. 98.)。

ることはできる。しかし、レヴィ=ブリュールの「融即」¹⁸と「ある」の関係をめぐるレヴィナスの次の記述に注意しなければならない。

プラトンの類の分有とは根本的に異なる〔レヴィ=ブリュールにおける〕神秘的融即においては、諸項の同一性が失われているのである。諸項は自らの実体性そのものの構成要件を喪失しているのである。[...] 存在する主体によって支配されているそれぞれの項の私的な実存は、私的というこの特徴を失って、漠とした基底に戻っていく。(EE, 99)

この引用は、「吐き気」において見出された「自己措定」としての「存在」とは際立った対立を示しているように思われる。というのも、「吐き気」は否応なしに自己を定立してしまうはたらきであり、定立する自己とされる自己に分裂しながらもその同一性こそを肯定していたからである。この同一性への反発と同一性を解体することの不可能性こそ「吐き気」を「吐き気」たらしめていた。ところが、「不眠」における「ある」は、自己の同一性の解体として記述されているのである。この点で、両者の「存在」の意味は全く異なると言うべきである。「吐き気」が開示するものは、「私たち存在者の存在」である点に注意しなければならない。たしかに、ロランのみるように「逃走論」において、後の「ある」を指示しうるような「純粋な存在」という語が用いられているが、しかし言葉の上で連関があるからといって、現象の構造上の連関まで存するというのは飛躍であるように思われる¹⁹。

3. アンセルの「自給自足体制(*autarcie*)」について

ロランの解釈は、後のレヴィナスの思考を無理に初期の思考に当てはめてしまった結果、結論ありきの解釈となり、かなり強引なものになっているのではないか。ジョエル・アンセルはこうした「回顧的」な解釈の不確かさを批判している。ロランの解釈の不確かさを指摘する点で、本稿はアンセルに与する。ここで、「自己措定」としての「存在」と「ある」という主題に関わる限りで、彼女の主張を見てみよう。

彼女は、初期レヴィナスが用いていた「存在論主義(*l'ontologisme*)」と「観念論(主義)

¹⁸ レヴィ=ブリュールの「融即」概念をレヴィナスが「積極的に吸収する」過程とその意味に関しては、藤岡俊博『レヴィナスと「場所」の倫理』、東京大学出版会、2014年、84-93頁を参照。

¹⁹ 『実存から実存者へ』では「吐き気」が主題的に分析されることはない。「[恐怖において]主体は非人格化される。実存感情としての『吐き気』は、まだ非人格化ではない」(EE, p. 100.)という一節はあるが、これは直後に「出口なし(*sans issue*)」という語が出てくる文脈上、「逃走論」における「吐き気」というよりも、サルトルを意識していると思われる。この点は、西谷修訳『実存から実存者へ』、講談社学術文庫、1997年、130頁、訳註(10)に指摘されている。アンセルはこの箇所での「吐き気」の記述を持ち出して「ある」とは異なることを指摘しているが、しかしこの主張は文脈を無視しており、いささか説得力に欠けるように思われる。Cf. Hansel, « "L'être est" et "Il y a" », p. 73.

(l'idéalisme)」という用語を、それぞれハイデガー存在論や哲学的立場としての観念論の枠を超えて、「人間精神のふたつの根本的な態度、存在するふたつの様態、世界と関係するふたつの様態」²⁰を示すものだと考える。ここで「存在論主義」とは、「人間の自由を損なう存在という野蛮な事実」(DE, p. 91)を出発点として引き受け、思惟する自我が自分で自分の基礎づけをなしうるとする「観念論」的前提を否定する立場一般のことである。つまり、人間の精神は存在に還元されるのか(「存在論主義」)、それとも存在が精神に還元されるのか(「観念論」)。しかし、注目すべきは両者の違いではなく、両者が「秘密の共犯関係を結んでいる」²¹点である。存在に抗して進展してきた「観念論」としての伝統的哲学は、この共犯関係のせいで、はじめから「存在論主義」的立場を乗り越えることができない。というのも、「観念論」は「自我を自己に充足するものとして考えることによって、他のものに依拠せず自己自身で自己規定する存在をモデルとして、自我を理解している」²²からである。この「自分自身で自己規定する」ことが、人間存在の「自給自足体制」と言われている。したがって、「観念論」は「自給自足的自我がもはや認識の独特な主観ではなく、ひとつの存在、ひとりの実存者である」²³という点に自覚的でないのである²⁴。レヴィナスにとって「野蛮さ」とは、観念論的主観の自由を損なう存在の野蛮さではなく、主観が存在するという事実の自給自足体制そのものにある²⁵。

こうした存在の「自給自足体制」というアンセルの見解は、本稿が「吐き気」の分析において見出した「自己措定としての存在」と相容れるものである。また、ロランへの批判でも、『野蛮さ』という語を用いることで、レヴィナスが念頭に置いているのは、存在の中性的ないし非人称性ではなく、存在の自給自足体制であり、自己自身との同一性のほうなのである²⁶という点で本稿の立場と合致する。

さて、アンセルは『実存から実存者へ』における「疲労」の現象学について、「ある」の特徴を明らかにするとともに、ある程度までは「逃走論」における「自給自足的」存在にもつながるといふ。本稿はこの両義性に注目したい。しかしアンセルの考察には詳しい現象分析が見出せないため、本稿ではこの問題に取り組もう。

²⁰ *Ibid.*, p. 66.

²¹ *Ibid.*, p. 68. / Cf. Hansel, « Autrement que Heidegger », p. 40.

²² *Ibid.*

²³ *Ibid.*, p. 42.

²⁴ 「逃走論」でレヴィナス自身次のように述べている。「観念論が存在から解放されているというのは、存在の過小評価に基づいている。だから、存在を乗り越えたと思ひ込むまさにそのときに、観念論は八方から存在に侵食されているのである。観念論が世界を溶かし込むあの知的な諸関係は、それでもやはり諸々の現実存在には変わりなく、それはたしかに惰性的なものでも不透明なものでもないが、しかし存在の法則から逃れることはないのである。」(DE, p. 126.)。

²⁵ 「諸事物の本質や属性は不完全ということはありうるが、しかし存在の事実そのものは完全・不完全という区別の彼方に位置づけられる。存在の揺るぎなさの野蛮さは、絶対に充分なものであり、他の何ものにも依拠することがない。存在は存在する」(DE, p. 93. / cf. Hansel, « "L'être est" et "Il y a" », p. 69.)。この存在の「野蛮さ」を明示する現象こそ「吐き気」だと言いうことができるだろう。

²⁶ *Ibid.*

4. 『実存から実存者へ』における「疲労と努力」の現象学と「瞬間」論

4-1. 「疲労と努力」の現象における「瞬間」の生起

まず「疲労と努力」が、存在の「自給自足体制」を露わにする考察からはじめよう。これを明らかにするために、疲労と努力の「瞬間」に関する記述に焦点をあてる。本節では「瞬間はひとつの塊でできているのではなく、分節されているのである」(EE, 17)という謎めいた記述を明確化することによって、努力と疲労による自己措定のはたらきが見出される。

長時間重い荷物を持たなければならないようなとき、手はだんだん痺れてきて、最終的にはその荷物を持っていられなくなってしまう。荷物を持ちつづけようとしながらも、その重みについていくことができず、自分の意に反して放棄してしまう。これが痺れに見られる疲労の現象である。

疲労における痺れは非常に特徴的である。痺れとは、ついていくことの不可能性であり、存在がみずからの執着しつづけるものに対してたえず食い違ってゆくことなのである。たとえば、それは持ちつづけようとするものを徐々に放してしまう手のようなものであり、さらにはまだ持っているまさにその瞬間に放してしまってもいる手のようなものである。疲労とは、この弛緩の原因というより、この弛緩そのものである。(EE, 42)

ここでは、荷物を持つと同時に放してもいるようなできごととして、緊張と弛緩が同時に成立するできごととして、疲労が採り上げられている。つまり、持ちつづけようとする緊張(執着)とそれに反して放してしまおうという弛緩が、痺れとしての疲労の現象である。この引用から読み取るべき点は、痺れにおける弛緩としての疲労が「持ちつづけようとする」という努力を前提としているということである。重い荷物を持っているからといって、ひとは必ずしも疲労を感じるとはかぎらない。疲労が疲労として感知されるのは、重い荷物を支えるのに「努力」が必要になった瞬間である。私たちにとって疲労が現れるのは、努力の瞬間においてなのである。「実際、疲労は努力や労働においてしかない」(ibid.)。

その一方で、実は努力は疲労を前提にしている。この前提は、努力に対する疲労の先行性にある。疲労が「弛緩」そのものであることに注目しよう。この弛緩によって離れていくものを取り戻すはたらきとして努力が記述されるのである。つまり、弛緩なしに努力は努力になりえない。だから、努力する瞬間に、努力は自分が追いつこうとするものとの隔たりを生み出す疲労を前提しているのである²⁷。この疲労の先行性はもちろん、疲労が努

²⁷ 「努力は疲労であり、苦勞である。疲労は付帯現象のように努力に付け加わるのではない。努力はいわば疲労からこそ飛び出してくるのであり、努力が舞い戻る先は疲労なのである。」

力の瞬間に先行する瞬間に存在し、疲労が原因となって努力が生じるという意味ではない。また、努力の瞬間において、疲労の瞬間がそれに先行する別の瞬間として措定されるわけでもない。

努力には持続を停止させ、自己回帰する構造が確認できる。再度、重い荷物を持つ手の例を考察してみよう。そのままでは手から離れていく荷物を、その流れに反して捕えようとするはたらきが努力である。このとき、身体的な持続にいわば楔が打ち込まれることになる。

持続において、努力は時間の糸を引き裂き、結び直して瞬間を引き受ける。努力はみずから引き受けることになる瞬間に遅れているのであり、したがって、メロデーにおけるのとは異なり、努力はみずからがかかわりあう現在から依然として解放されてはいない。[...]そして、努力は現在へと拘束されていると同時に、未来の瞬間へ向かう飛躍のようなものでもない。努力は不可避の現在としての瞬間と闘っているのであり、この現在のうちに永久に拘束されるのである。(EE, 48)

努力は持続に反して、停止点を生じさせる。こうして生起した瞬間は他の瞬間との相互浸透も欠いている。身体的持続の流れに従えば手は荷物を放してしまうので、次の瞬間もまた「頑張っ」て荷物を持たなければならないのである。したがって、努力がなされるその都度、現在としての瞬間が生起するのである。だから、努力の構造上、この現在が次の瞬間に浸透して新しい持続をかたちづくることはありえない。努力によって瞬間は持続からも他の瞬間からも断絶するのである。また、上の引用では、努力が未来の瞬間へと飛躍しない理由は「みずから引き受けることになる瞬間に遅れている」ことにあるとされている。この点についても考えよう。先行するのは、持続的流れである。努力の瞬間にこの持続は、努力への反発（緊張に対する弛緩）として、つまり疲労として感知される。努力が取り戻すべき隔たりは、この疲労によってもたらされる。常に努力は流動に対して遅れているのであり、瞬間が生起しこの遅れが取り戻されたとしても、努力はこの遅れ、つまり疲労の先行性を「取り戻し」という仕方で肯定してしまう。たしかに、努力は隔たっていくものを取り戻すという仕方で飛躍すると言いうことができるが、しかしこの飛躍は未来の瞬間への飛躍でもなければ、過去の瞬間の取り戻しでもない。なぜなら、過去や未来はひとつの現在という中心点から見てはじめて意味をもつものである以上、その中心となる現在という瞬間の生起を待たなければならないが、しかしまさにこの瞬間の生起こそいま語られているものだからだ。さらに、この瞬間の生起に過去と未来は全く入る余地がない。というのも、先述のとおり、持続的相互浸透が努力によって断ち切られることで瞬間が絶対的なものになっているからである。努力は、常に現在の瞬間の生起を、持続の否定と他

(EE, p. 44.)

の瞬間の否定とともに実現せざるをえず、それゆえ「現在のうちに永久に拘束されるのである」。

議論をまとめるために、ひとつの瞬間の孤立を可能にするのが、努力の内的差異化のはたらきであることに注意しよう。ここでの内的差異化とは、努力が自らに反発するはたらきを常に「引き受け」という仕方で肯定するということである。つまり、持続と他の瞬間の否定を含む努力は、ひとつの瞬間の内部に遅れを生じさせる「遅延化」のはたらきを肯定する。この遅延化が疲労として感知される。だから、瞬間は努力と疲労という仕方で「引き受けられる」ことによってはじめて成立する。「引き受ける」はたらきが努力として、「引き受け」という遅れをかたちづくる遅延化が疲労として、それぞれ具体的現象において確認されているのである。したがって、ひとつの瞬間は、内的差異化とその取り戻しによってはじめて成立していることになる。ここでは、自己の取り戻しとして自己が成立するという「内的弁証法」(EE, 44 et pass)が形成されており、これが「内的」に完結しているからこそ、瞬間が「ひとつの」瞬間でありうるのである。この内的完結には、内部分裂が必要であり、これは「自己自身に対して遅れる現在というそれ自体ほとんど矛盾した契機」(EE, 51)としての疲労によって実現される。こうして、「瞬間はひとつの塊でできているのではなく、分節されている」という本節冒頭の文言が理解できるようになる。

さて、以上の努力と疲労の現象学的考察は「瞬間」の構造を理解するための踏切板になっている。つまり、考察されたのは、努力と疲労における瞬間の構造であるばかりでなく、瞬間というものが、内的差異化（疲労）と取り戻し（努力）によって構成されるということなのである。「瞬間」のこの構造は、「自給自足的」構造をもつと言える。なぜなら、ひとつの瞬間のうちで、努力と疲労が自己規定しあいながら遅延を引き受ける「主体」が生起するからである²⁸。

4-2. 「瞬間」から「ある」へ

では最後に、「疲労と努力」の現象がどのように「ある」とかかわっているのか考察しよう。レヴィナスは「ある」からひとつの実存者が誕生する出来事として「瞬間」としての現在を記述している。とはいえ本稿の関心は、「ある」から「瞬間」が生じる過程を記述する²⁹のではなく、「瞬間」の側から「ある」の特徴を見出すことにある。この観点で、「疲労と努力」の議論を見直してみよう。

まず指摘できるのは、努力に対して持続が先行している点である。「瞬間」において努力

²⁸ 「現在とは、実存の匿名的なざわめきのなかで、この実存と闘い、これと関係し、これを引き受けるひとつの主体の出現なのである。行為とは、この引き受けのことである。これによって、行為は本質的に束縛であり、隷属であることになるが、反面、実存者、つまり存在する誰かの最初の現出ないし形成でもあるのである。」(EE, p. 49.)

²⁹ これは「基体化(l'hypostase)」の議論であり、多くの先行研究が存在する。たとえば、屋良朝彦『メルロ＝ポンティとレヴィナス—他者への覚醒』、東信堂、2003年、103-110頁を参照。

は隔たりを「取り戻す」のであった。気をつけなければならないのは、「瞬間」のなかに内的差異化と取り戻しが含まれており、この瞬間自体が人間的主体の生起であることを考えると、差異の取り戻しとしての努力にその担い手となる「主体」はまだ見出せないという点である。つまり、努力する主体が事前に存在するという議論構成ではないのである。そうであるならば、「疲労と努力」の「瞬間」は、人間主体（「実存者」）が生起する以前の領野、つまり「ある」とのつながりを証していると言することができるだろう。

だがそれだけでは不十分である。「瞬間」の構造から出発して、「ある」の特徴である「同一性の解体」を認められるかどうか問われるべきである。この点に答えるために、持続に対する反発としての努力の特徴について再度検討してみよう。

「瞬間」とは「自給自足的」な実存者の生起の現場である以上、この実存者の「自己」同一性の解体の危機が問題になっているわけではない。この点で、「瞬間」の議論から「ある」の特徴を見出そうとする試みは、「不眠」が「ある」の特徴を見るに至った道筋とは出発点からして異なることになる。「瞬間」において問われているのは、実存者がはじめて生起する場面である。これを念頭に置いて、持続に対する努力の反発を考えなければならない。

ここで、「吐き気」との差異の観点で見てみよう。「吐き気」は完全な自給自足体制を描いている。なぜなら、「吐き気」の自給自足体制を描き出す自己分裂と密着の仕方は、自己を拒否しようとしてもその拒否するという活動性そのものによって自己を背負うことに運命づけられるという逆説にあったため、この構造には自己以外を指示するものは何も見出されなかったからである。それに対して、「疲労と努力」はどうだろうか。努力が反発しているのは、「自己」を背負うことではない。むしろ積極的に「自己」を背負おうとしていると見るべきである。努力が反発する持続とは、「自己」のこの引き受けを妨害するはたらきをもっている。それが「瞬間」に含まれる疲労としての「遅延」である。したがって、引き受けられるという仕方で実存者が出来る「瞬間」のできごとには、努力が疲労のこの妨害を乗り越えているということがすでに含まれているわけである。この関係は実存者が生起する以前の段階でなされている以上、「吐き気」のように「私たち自身に反逆する私たち自身の現前」、つまり自己に対する自己自身の現前ではいまだない。「瞬間」に含まれているこの妨害は、むしろ「私」という実存者が「ある」から生起する際に認められる「同一性の解体」だと言えるだろう。否、ここでは「同一性の解体」というよりも「同一化の阻害」というべきかもしれない。この阻害を乗り越えて生起した実存者に関しては、自己と自己自身の関係の閉鎖性を構造上免れえない。なぜなら、すでに自己が引き受けられてしまっているからである。この点では、「吐き気」と同様の「自給自足体制」が認められる。しかし、「瞬間」は、実存者が誕生する以前の「同一化の阻害」という要素を指し示している。したがって、「瞬間」は完全な「自給自足」ではなく、「ある」へも開かれている。ここにアンセルが暗示していた「疲労と努力」の両義性の意味があると思われる。

おわりに

本稿は前期レヴィナスにおける「吐き気」と「疲労と努力」の相似と差異を、ロランとアンセルという二人の解釈者を介して、明示しようとした。「吐き気」は完全に自給自足しているのに対して、「疲労と努力」には自給自足的閉鎖性と「ある」への開けの両義性がある。本稿では、具体的な現象分析を通して、アンセルが暗示していたこの両義性に明確なかたちを与えるよう努めた。この両現象間の構造上の差異は、レヴィナスの思考の進展を表しているといえるだろう³⁰。アンセルの述べるように「回顧的」解釈のせいで、たしかにこの進展が見えづらくなる。本稿では、このアンセルの批判に呼応して、両現象の構造を問題とし、両者の微妙な隔たりを前景化した。

レヴィナスの文献（訳出は筆者によるが、既刊の邦訳を適宜参照させていただいた）

Emmanuel Levinas, *De l'évasion, Le livre de poche*, 2018. [=DE]

（『超越・外傷・神曲——存在論を超えて——』内田樹／合田正人編訳、国文社、1986年。）

———, *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, Vrin, 2010. [=EDE]

（『実存の発見 フッサールとハイデッガーと共に』佐藤真理人／小川昌宏／三谷嗣／河合孝昭訳、法政大学出版局、1996年。）

———, *De l'existence à l'existant*, Vrin, 2004. [=EE]

（『実存から実存者へ』西谷修訳、講談社学術文庫、1997年。）

³⁰ まさにアンセルの眼目は、1930年代のレヴィナスが、当時のガブリエル・マルセルやルイ・ラヴェルという二人の哲学者からいかに影響を受けて、思考を進展させていたか、また当時の段階では、まだ「存在の彼方」という円熟期の発想を持っていなかったことを明示することにある。Cf. Hansel, « Autrement que Heidegger », pp. 37-53.

De la « nausée » à la « fatigue et l'effort » chez Levinas à ses débuts

Hiroyuki TAKANO

Cet article se concentre sur la « nausée » et la « fatigue et l'effort » chez Levinas, et vise à clarifier les similitudes et les différences entre les deux structures. Ce faisant, nous comparerons les points de vue de Jacques Rolland et Joëlle Hansel. Rolland cherche à mettre en évidence les germes potentiels de concepts ultérieurs aux pensées de Levinas. Hansel, d'autre part, affirme qu'une telle interprétation « rétrospective » n'est pas en exacte adéquation avec les intentions philosophiques qu'avait Levinas à l'époque. Elle découvre dans la « nausée », l'« autarcie » des êtres humains, et leur besoin de s'en échapper. Nous allons nous baser sur le point de vue d'Hansel et de son analyse de l'évolution de la pensée de Levinas au fil de sa vie. Néanmoins, comme elle n'a pas fait d'analyse de phénomènes concrets, nous tentons de compenser le manque de recherche dans cette perspective. Pour la première fois à travers cette analyse de phénomènes, nous pouvons voir que la « fatigue et l'effort », qui a une structure similaire à la « nausée », a l'aspect de révéler « Il y a ». Nous aspirons à lever le voile sur les différences structurelles entre ces deux phénomènes.